Japanese Association for Religious Studies

井前掲書所収）や、①サービス系、②アクティビズム系、③ダイアローグ系（大谷栄一、稲場・櫻井前掲書所収）に大きく三分類することも有効と思われる。

社会貢献の形態としては、企業の場合、①寄付、②自主プログラム、③従業員の社会参加支援の分類が一般的である。この活動主体による形態の分類に、活動場所、活動頻度、活動対象をいれて、包括的に、宗教団体による社会貢献活動の形態を整理すると以下のようになる。①場所：教団施設内／教団施設外、②頻度：継続／要請に応じて／緊急災害時、③主体：教団／外部組織と共同／外部組織を支援（資金的援助）、④対象：教団内の人／教団外の人／社会一般。

ピエール・ブルデューは、かつて「学者が伝統的に自己に課してきた慎みから脱却すべきではないでしょうか」、「社会参加型の知を生み出すためには、実際には学問性の規則に従って自律的に研究しなければなりません。社会参加を伴う学問性であるべきなのです」と語った（「研究者の社会参加に向けて」『ル・モンド・ディプロマティーク』二〇〇二年二月号）。宗教の社会貢献活動研究も、社会参加を伴う学問性でありたい。そして、その社会参加のあり方は多様でありたい。

「宗教の社会貢献活動研究プロジェクト」（http://keishin.way-nifty.com/scar/）

社会的宗教と他界的宗教への序章

――ケン・ウィルバー論から――

津城寛文

宗教学も、他の諸学と同様、さまざまな下位分野に分かれて、それぞれの個別研究が行なわれている。研究環境の風通しを良くするには、研究方法も対象も様々であることを確認するのが有効である。このような自他の反省を高めるためには、できるだけ多様で多層なビジョンを、作業の出発点に組み込んでおく必要があり、後期・ウィルバーの四象限図は、そのための有力な一つになり得る。

ウィルバーの四象限図には、近現代（一部、古代）の著名な思想や学説が、それぞれ限定された射程でもっぱら有効であることが図示されており、縦軸の上方向を「個人的」、下方向を「集団的」、横軸の左側を「内面」「解釈(学)的」「意識」、右側を「外面」「独白的」「経験的、実証的」「形式」、と指示している。

宗教研究の射程確認のために、このような見方がどう有効なのか、例としてベラー批判を見ると、ベラーは、「左下象限とその主要な二つのレベル、そして各レベルでの主要な二つのタイプに焦点を合わせている」と位置付けられる。

『構造としての神』の第七章、「今日の宗教社会学」の要点は、「本格的な宗教」と「合法的な宗教」の区別にあり、多くの宗

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

教社会学は「本格性の度合」＝「垂直的な次元」を知らないと批判される。ウィルバーは「それぞれ十分に合法的」な九つの宗教の定義を整理している。そのうち八つ目は「合法的」宗教で「マナ」を用意し「タブー」を回避する、水平的なトランスレーションを有効にする。九つ目は「本格的」宗教で、「もっとも中心的な意味で宗教的であると目されるある特定の次元・レベル」へ向かう、垂直的なトランスフォーメーションを有効にする。「合法性の危機」とは、マナおよび不死の記号が統合的防衛的な昨日を果たしそこなう、つまり翻訳＝変換の失敗の結果であり、「本格性の危機」とは、「もっと高次レベルの世界観からの挑戦に直面」したときに、変形＝変換の第一歩として起こる。そして、すべての宗教（または世界観）は、合法性と本格性の度合という二つの異なった独立変数を尺度として、「妥当性の度合」を判定できるという。

禅仏教の瞑想実践をベースにしたウィルバー自身の宗教研究が、極度に個人的・内面的な関心と垂直的な志向を持っていることは歴然としている。ただし、統合的ビジョンを主張するからには、そこに自閉することはもはやあり得ず、宗教研究においては、二つの方向を自ら推進しようとしている。一つはトランスパーソナル心理学の応用であるトランスパーソナル社会学（＝超越的社会学）というかなりエクステンシヴな課題であり、もう一つは瞑想実践の自然科学的実験による裏付けというきわめてインテンシヴな課題である。

「トランスパーソナル社会学」「超越的社会学」は、「階層秩序」を考慮した「批判的規範的な宗教社会学」であり、その際の有力な道具の一つが、「本格性」と「合法性」という対概念である。宗教社会学で現在流行している言葉で言えば、この「合法性」とは「公共性」のことであり、宗教社会学ではむしろ主流であり続けているテーマと言ってよい。他方、ウィルバーの言う「本格性」とは宗教の発達段階のことであり、このような規範的価値を強調する宗教研究者は周辺的である。

ウィルバーを読み進むなかで、私が随所で疑問を覚える点は、「死者」「死後世界」がほとんど主題化されていないことである。じっさい、永遠の哲学の「非二元的な伝統」にとっては、生者と死者の区別は問題とならない。生と死の関係を主題化すると、そうしたトランスパーソナルな「スピリット」の壮大な説明と比べて、自己収縮的なパーソナルな段階の「ソウル」を強調せざるを得なくなることがわかる。

現象学的社会学における超越概念

諸岡了介

一九六七年に『見えない宗教』（英語版）を発表したトーマス・ルックマンは、その後、アルフレッド・シュッツによる超越の現象学に触発されながら、宗教の私事化論を深めるかたちで「超越の縮減」論を展開している。

ルックマンが編集を行った遺稿『生活世界の構造』で、シュッツは「大規模な超越」「中規模な超越」「小規模な超越」とい

NII-Electronic Library Service